明治の佐伯三青年　（23）

―― 龍渓・鳴鶴・鶴谷 ――

御手洗　一　而
（賛助会員・川越市小堤）

国会期成同盟

「国会論」が世論の脚光を浴びる頃、十一月に愛国社の第三回大会が大阪で開かれた。この大会には、従来の政治結社十三社に加えて、新しく五社が加盟し、国会開設の請願運動を大会の最重要課題とした。立志社から発展した愛国社は、路線の組織が拡大するにつれ、内部にも派閥によるいろいろな批判もでたが、請願運動が全国的に始動する一つの意義はあった。

矢野が大隈卿の許で政府部内に入った如く、政府の中にも国会開設に期待するうつぼつたる勢力がひそんでいたが、入る者があればはみ出して野に下る者もあった。

矢野の狩猟仲間であった沼間守一は、そのはみ出し組の一人であった。沼間は官吏服務規定にふれて野に下ったが、代言人として活躍しながら横浜毎日に入社していた。

その沼間がひょっこり報知社に藤田を訪ねて来た。藤田は、珍客の来訪に驚いた様子であったが、沼間は相変らず威勢がよかった。

「おい藤田。俺もお前達の仲間に入れてもらうことにした」

藤田は一瞬仲間と聞いて真意をはかりかねたが、沼間の説明で納得することができた。

「今度、横浜毎日を買いとることにした。ついては東京に出ることに決めたのでよろしく」

短刀直入な挨拶であった。

「そうですか。沼間さんが東京進出とあっては、言論界も心強い」

藤田も仲間の意味が解けて応じた。

「これからは好きなことが言えるわい。矢野にも挨拶と思ったが、又睨まれると矢野も困ることになる。そちらから宜敷く伝えておいてくれ」

沼間はこう言って軽く頭を下げたが、挨拶が終ると、さっさと社を出て行った。

藤田は沼間を社前まで見送りながら、いろいろなことが頭をかすめた。又一社競争相手が増えたということもあったが、論説の筆をとる陣容に興味があった。

横浜毎日は、この年の十二月に「東京横浜毎日」と改め、京橋紺屋町に移転した。そして、藤田が興味のあった論説陣には、沼間は肥塚龍を主筆に採用していた。肥塚は、駅逓局の電信技手をしていたが、「東京曙新聞」への投書が発覚して、官人を首になっていた熱血漢であった。沼間の旗上げは、強力な言論界の味方ではあったが、商売上では強敵でもあった。

「東京横浜毎日」の紺屋町進出にともない、明治十一年から十二年にかけて、各新聞社は、殆んど銀座周辺に集まることになった。銀座四丁目の角には、東西に向かい合って「東京曙新聞」と「朝野新聞」が位置し、五丁目には「東京日日新聞」が控え、薬研堀の「郵便報知新聞」を加えると、五大紙が足並みを揃えていた。ただこの頃の新聞は、福沢の「国会論」の社説も手伝って、政論紙としては、「報知」が一歩抜きん出ていたようである。

又この時期に、三田派の有志は、小幡篤次郎の発案により、新設する憲法の研究を進めるため、毎週一、二回交詢社に集まって会合を持った。ちなみに、この交詢社の集会が、日本のクラブ組織の始まりだといわれている。なにしろ、憲法によって定められる新しい国家、立憲政体といっても、いざ実現となると、初めてずくしで定見があるわけではない。小幡をはじめ中上川・荘田・阿部馬場等、三田派の代表的人物が集まって、親睦をかねて憲法の討議を重ねても不思議はないが、このことが、後日、政変につながるきっかけになるとは、誰も予想し得なかったし、混乱期の一つの時代を現わしているとしかいいようがない。

このように国民世論の沸騰する中で、政府はいろいろな難問をかかえていた。

政府は、全国各社の動きについては、密偵を放って的確な情報を得ていたが、内部にかかえた西南戦争の財政処理は、難問中の難問で、各参議の意見もまちまちであった。

これらの難問を受けて、矢野は帰宅しても様々な法案

の整理に余念がなかったが、こんな時に、藤田が沼間の一件を伝えるため来訪した。
「いよいよ旗上げしたか。奔放な沼間さんにはその方がむいているかもしれぬ。ただし、強敵になるかもしれぬのう」
矢野はこう言って笑った。
「強敵は望むところだが、情報だけは頼みますよ」
藤田はその方が心配であった。
「大隈さんがいる限り、政府の動きに心配は要らぬが、政府という所はいろいろな仕事のある所じゃ」
矢野の言葉に藤田は黙っていた。
「宮仕えしてわかることだが、国会開設だけが問題ではない。国に金がないのも大問題じゃ」
「西南戦争のー」
金と聞いた藤田は問い返した。
「その通りじゃ茂吉。西郷どんも皮肉な乱を起こしたものじゃ。民権運動は華々しくて国民の共感を得るが、同じ問題でも金の跡始末は皆知らぬ顔じゃ。これでは国が成り立たん。大隈さんが独りで苦慮しているが、部内にもいろいろな意見が出ている」
矢野は一旦話を切って茶を啜った。
「あの時は軍事費がいるため、紙幣ばかりを増発したが大隈さんは、一先ず紙幣の縮減に重点をおいて整理を考えている。一方、松方卿は、中央銀行制度を確立して、長い眼で、健全な通貨主義の実現を説いている。時間の問題もあるが、もう一つ問題があるんじゃ」
「問題といいますとー」
藤田は再度問い返した。
「大隈さんも横浜正金銀行の設立を計画している。銀行制度の必要性は認めているが、後循がないんじゃ。松方には理想もわからぬではないが、薩長閥肩入れの匂いがふんぷんとしている。評価の違いが派閥の勢いで押し切られるのも腹が立つんじゃ」
矢野はこう言いながら腕を組んで天を仰いだ。
「むづかしい問題ですなあ」
藤田はつられるように腕を組んで同調したが、藤田の矢野邸訪問は、いつも情報交換の場でもあった。

年が明けて、明治十三年二月、大隈は横浜正金銀行を設立し、福沢の門下生が多数送り込まれた。又第三回地

方官会議が招集され、朝野にいろいろな動きがみられた。
矢野は、この地方官会議に政府委員として出席し、備荒蓄法案の説明に当ったが、岡山県議の代表であった忍峡は、第三回地方官会議傍聴のため上京していた各府県会議員百四名を糾合して、二月二十二日両国中村楼に集まり、「地方聯合会」を設立して、国会開設建言書を提出した。
一方、県議による横の連絡が進んでいる時、政府は、二十八日内閣と諸省を分離して、大臣・参議・諸卿の間に一大更迭が断行された。
太政大臣には三条実美、左右大臣には熾仁親王と岩倉具視、参議は大隈・伊藤・寺島・西郷・川村・山田・山県・黒田・井上・大木が任命され、各省卿には松方・佐野・大山・榎本・河野・田中・山尾が当てられた。
矢野も三月五日には、大蔵省少書記官から内閣直属として太政官書記官に任ぜられ、会計部勤務を仰せつけられた。矢野にしてみれば栄進であったが、今度の内閣改造を見て、矢野は嫌な予感がしていた。
つまり、大隈を参議にまつり上げ、殆んどの部下も大蔵省を離れた。そして、新たに大蔵卿になった佐野常民が、大蔵の実務を担当するということは、明らかに大隈の実権を削減するものであった。しかもこの更迭が、廟堂の決議によってなされたことは、薩長の前に大隈がいかに無力であるかを証明するものであった。
矢野は少なからずあせりを覚えた。
このまま進めば、再び薩長による有司専制に屈服しなければならない。折角盛り上がりつつある民権運動・国会開設も、薩長閥のため時機を失うことになる。国会開設だけは、悲願のためにも急がねばならないと思った。
矢野には、こうした多忙の中にも喜びが待っていた。三月九日、次男正男が授かった。十一年の長男静雄誕生に続いてのおめでたであった。この知らせを受けた藤田は、とるものもとりあえず俥で駆けつけたが、矢野はまだ役所から帰っていなかった。矢野が帰って来たのは日が暮れてであったが、わが子との初対面を済ますと、藤田の祝いの口上を聞くのももどかしく応接間に誘った。
「茂吉、交詢社の話は進んでいるのであろうか」
矢野の方が先に口を切った。
「その後詳しくは聞いておりませんがー」

藤田がありのまま答えると、女中が茶を運んできた。
「茶よりも酒の用意をせい」
矢野はこう命じて、椅子から洋服姿を乗り出した。
「茂吉。急がねばならぬぞ」
「わかっておりますが何かー。この度の内閣更迭の真意を聞こうと思ったのですがー」
藤田は殆んど同時に問うた。
「その事よ。今度の内閣改造は、大隈さんの更迭、排斥とみなければならぬ。急な内閣分離策は認められぬのじゃ」
「その通り、真意をはかりかねますがー」
「真意も何もあるか。要は薩長の実権を容易には渡さんということじゃ」
「結果的にはそうなりますがー」
「うん。こうなったら世論と薩長の対決だな。国会開設も時機を失ったら何時になるかわからぬ。急がねばならぬぞ」
矢野は腹にすえかねている様子であった。
「そうですか。その旨を交詢社の面々にも伝えましょう」
藤田は矢野の交詢社によせる趣旨を察していた。
「そろそろ試案でも出来るかと思ったが、こうなると時間の問題じゃ。わしらも憲法の私案ぐらい考えねばならぬ。その時は使いをよこして交詢社に運んでくれ」
藤田は大きく頷いていた。
「矢野さんは表立って動けますまい。となると、もう少し書き立ててやりますか。先日の県議の建白書に続いて請願運動をあおる手もある」
「すべての方法をとらねばならぬ」
矢野は意を決しているふうであった。
二人はそれぞれ自分の立場で出来ることを考えていたが、藤田は別れ際に大阪行きを示唆した。
「十五日には、愛国社の第四回大会が大阪で開かれると聞いている。大会の視察かたがた明日にも大阪に下ろうと思っている。
「そうか。大会がどのようにまとまるか見物じゃのう」
矢野は初めて白い歯を見せた。
「祝いの席が変な話になり申した」
藤田の言葉に二人は声を出して笑ったが、
「沼田さんにはくれぐれも宜敷く」
と、矢野はつけ加えるのを忘れなかった。

その夜、藤田は帰宅を急いだ。客人が待っているはずであった。客人は、犬養であったが、犬養は藤田を待ちかねたように、豊吉のすすめもあって、遅い夕食を共にしていた。

「ようー。元気だったか」

「はい。戻って参りました」

犬養は箸をおくと、悪びれた様子もなく一礼した。

「どうしているかと心配していたが、顔も見せず頑固だからなあ」

と、藤田はほゝ笑んでいた。

「翻訳文の添削などをして、どうやら食いつないでおりました」

犬養も笑っていた。

もともと藤田の無理難題から袂を分かった犬養であったが、恩人とする藤田にうらみがあるわけではなかった。頑固な二人には時間が必要なだけであった。

「明日にも大阪に下ろうと思っている」

「例の大会ー」

「そうだ。大会の盛り上がりをこの眼で確かめようと思っているが、留守の間何か書かぬか。報酬ははずんでやるぞ」

犬養にとって悪い話ではなかった。

「有難うございます」

犬養は素直に頭を下げた。

その夜、犬養は藤田家に一泊したが、藤田は遅くまで社説の草稿をねっていた。

そして、翌朝、藤田は「内閣分離ノ趣意ハ何レニアル乎」の一文を犬養に託すと、そのまま大阪に下った。藤田の留守中、報知の社説には、犬養の寄稿した「通商論」に関する論説が隔日に掲載されていた。

さて、大阪では、十五日に愛国社の第四回大会が、二府二十二県八万七千余人の総代、十四名を集めて開かれた。参加者は、先ず北久宝寺町の喜多福亭に会し、十七日に北野大融寺で大会を開き、社名を「国会期成同盟」と改め、国会開設願望書の提出を定めた。

しかし、藤田の参観した大会は、議場騒然として、会議の形態をなすものではなかった。自由党史をかりると

「大会の光景は、頗る盛観を呈したるに拘らず、会衆紛沓、未だ議事に練熟せず、加ふるに地方感情の介在する

者あるが為に、会の開くるに及で、喧囂殆ど制すべからず」

と、その日の光景を記している。

会議に不馴れなせいもあったが、「土佐人の多数を制せんことを忌むなり、而して正幅議長共に立志社の選に帰するを見て、倍々之を快とせざるもの多し」として、各県の代表者は好んで秩序を紊し、河野広中・内藤魯一等は、「其勢力土佐人士に遜るを以て遺憾と為さば、諸士も亦た宜しく其功労の多きに居らんことを念とせよ」と、その場を鎮撫している。

―目的は何とするもこの統制は難事だぞ―

藤田の眼に映った直感であった。

―朝に薩長閥あれば野に土佐閥か―

藤田のいつわらざる心境であったが、朝野における派閥の抗争は、現実問題化していた。

それでも大会は、最終的に片岡健吉・河野広中を願望書捧呈委員に選出して幕を閉じたが、この大会の動きを重視していた政府は、先手をうって、四月五日に集会条令を布告した。

藤田は帰京して、この大会の様子をつぶさに社友に話したが、藤田を追っかけるようにして、片岡・河野両委員も上京した。

そして、四月十七日、両委員は国会開設の請願書を太政官や元老院に提出したが、政府は即座にこの提案を却下した。